

## 詩篇142篇「牢獄での祈り」

### 1A 主への叫び 1-6

1B 声に出す祈り 1-2

2B 道を知る方 3

3B 孤独 4

4B 主こそ受ける分 5

### 2A 牢獄からの連れ出し 6-7

1B 御名への感謝

2B 正しい者の集まり

## 本文

私たちの聖書通読は、前回で詩篇 139 篇まで来ました。今日、午後に 140 篇から 144 篇までを読んでみたいと思いますが、今朝は交読しました 142 篇に注目したいと思います。この詩篇の背景は、その題名にあります。「**ダビデのマスキール。彼が洞窟にいたときに。祈り**」とあります。彼が洞窟にいた時の祈りです。彼はこの洞窟を、7 節では「牢獄」と例えています。なぜか？彼は、自分の命が敵に狙われていて、それで洞窟までやってきたけれどもそれ以上、どこに行こうにも動けない状態だったからです。

ダビデは、自分の舅であり、イスラエルの王であるサウルから追われる身となりました。彼には主が共におられて、ペリシテ人と戦うと必ず勝利しました。けれどもサウルはダビデを妬み、彼を殺すべく行動に移しました。彼は何も持たずにサウルの家から逃げたので、何も持っていませんでした。祭司アヒメレクのところに行き、その幕屋のところにあった、かつて彼が殺したペリシテ人ゴリヤテの剣がありました。それを受け取って逃げました。ところが、その様子をサウルの家臣であるドエクに見られてしまいます。そしてダビデは、ペリシテ人のいるガテに行きました。敵陣に入ったのです。ペリシテ人はダビデではないかと言うと、ダビデは恐れて気遣いを装いました。ガテの王アキシユは、「気遣いなど相手にする必要はない。」と言ったので、難を逃れたのです。そして今、ペリシテ人の領地から出た、ユダの地にあるアドラムというところの洞穴に隠れています。

彼のジレンマを想像してください。彼は云わば、「全国指名手配」を受けたのです。誰から殺意を抱かれたかといえば、一国の王です。ですから、彼がダビデを殺そうと思っていたのですから、イスラエルの地にいればすぐに、自分の命が狙われることになるのです。だからといって、ペリシテ人の地に行けば、そこはサウルの手が及ぶところでは確かにはないですが、ダビデはかつてペリシテ人に大打撃を与えていたのですから、彼らもダビデを殺そうと思えばいつでもできます。ですから、ダビデはいま洞窟に隠れていますが、身に付けられて殺されるのは、時間の問題のように見えました。したがって、彼にとっての洞窟はまるで、捕えられた者が収監される牢獄のようでもあり

ます。

私たちも生活の中で、洞窟のような境地に置かれているような苦しみを味わうかもしれません。「これをやれば、こうなるはずだ。」という、人の考えつく可能性が全く取り除かれてしまったような状態です。次に何をすればよいかもわからない、だから鎖で縛られているような不自由を味わいます。先週、ある姉妹と入院することについて話しました。ずっとベッドで食事をすることは牢獄にいるような苦しみだということ、息子さんがお話しになったそうです。私は入院したことがあり、たった四日でもその不自由さを味わいました。術後、絶対安静で頭も持ちあげてはいけない数時間は本当に辛かったです。

宣教地にいた時も、初期はもしかしたらそうだったかもしれません。自分のかける電話、自分の送る E メールはすべて聞かれている、見られているというように教えられました。私が初めてそこを訪れた時は緊張と疲れて、高熱を出して何と病院のお世話になりました。そして辛かったのは、言語の障壁により、福音に届きたい人に思うように届けないという制限でした。しかし、時間を経ると分かってきました。いろいろな制約が課せられている中で、むしろその制約の中にある自由があったのです。それは、「主が共におられる」という恵みがあったのです。そして、その制約があるからこそ主が豊かに施してくださり、ついには教会も与えられ、御言葉を語る機会も数多く与えられました。

ダビデが経験したのは、このことでしょう。初めは全くがんじがらめの状態でした。しかし、主に叫んでいる中で、主ご自身の臨在に助けられ、それで自分の周りに彼についていく人々が集められたことです。サムエル記第一 22 章 1-2 節にこう書いてあります。「ダビデはそこを去って、アドラムのほら穴に避難した。彼の兄弟たちや、彼の父の家のみなのが、これを聞いて、そのダビデのところへ下って来た。また、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところへ集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。こうして、約四百人の者が彼とともにいるようになった。」彼のところに集まったこれら四百人の多くが、彼が王となった時にいつも近くにいる彼を支えた家臣となっていきました。ですから牢獄にいるような時に、私たちは何から始めなければいけないのか、ダビデから学び取ってみたいと思います。

## 1A 主への叫び 1-6

### 1B 声に出す祈り 1-2

1 私は主に向かい、声をあげて叫びます。声をあげ、主にあわれみを請います。2 私は御前に自分の嘆きを注ぎ出し、私の苦しみを御前に言い表わします。

ダビデは、洞窟の中で叫ぶ祈りをしました。叫ぶとは、自分の心にあることを神に注ぎ出す行為です。私たちは、人との付き合いをする時にももちろん自分を抑えて話します。それは相手が限界ある人間だからです。けれども、主は私たちの体だけでなく、霊も魂も造られた方、私たちの心の巽

の最も細かいところまで知っておられる方であります。139 篇に、私たちに対する思いは、砂の総計よりも多いとありました。ですから、叫ぶことによって祈ります。

私たちは、そうした模範を見ると良いかもしれませんね。ぜひ、中国人の兄弟姉妹や韓国人の兄弟姉妹と祈りを共にしてみてください。以前、日本にある中国人教会の合同祈禱会に参加された方がおられますね。他の人に聞かせる祈りではなく、真っ直ぐ主に向かう祈りであったという感触を持つことができたのではないのでしょうか。主にそのまま、心を注ぎ出してください。

そしてダビデは、ここで「声を上げる」こと、苦しみを言い表すことを強調しています。心の中で抑えるのではなく、きちんと声に出して言い表しています。私たちは、主の御言葉などを思い巡らす時に、声を出さずに瞑想のように主の思いを知ろうとします。けれども、祈る時には声を出すことは大切です。もちろん主は、声に出さなくても私たちの内にある全てのものを知っておられます。ですから、声を出さなければ主に知られることができないということではありません。けれども、声に出すことは大切なのです。なぜなら、私たちの神は言葉をもって私たちと交わってくださるからです。言い換えれば、神は人格をもって私たちに付き合ってくださいさるのです。

「以心伝心」という四字熟語があります。言葉で言い表さなくても、心と心は通じ合うのだという意味です。しかし、これは初めではなく結果でしかすぎません。たくさん言葉によって語り、時間を過ごし、人格と人格をぶつけているからこそ、鉄を研ぐのに鉄を使うように、そこで練られてその交流が深まります。そしてついに、特定の言葉や言いまわしを少し使うだけで、あるいは目で合図をするだけで互いに通じ合うという境地に達することはできますが、その反対はないのです。相手が自分の苦しみを知ってくれるのは当然だとし、そのことを、言葉をもって意思伝達していなかったのであれば、相手が分かってくれないと言って責めることはできません。これは、全知全能の神ご自身に対してでさえ、そうなのです。神は言葉をもって、人格をもって私たちと交わりたいと願っておられるからです。

信仰というのは意志の表れであり、意志を表すには言葉を使わないといけません。エリコにイエス様が近づかれると、道端に盲人がいました。彼は、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と大声で叫んで近づきました。彼がその目が見えるようになることは、誰の目にも明らかでした。けれどもイエス様は敢えて聞かれました。「わたしに何をしてほしいのか。」そして盲人は、「主よ。目が見えるようになることです。」と答えたのです。そしてイエス様は、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われました(ルカ 18:35-43)。

それでも、「言葉にならない呻きがあるのではないですか」と言われるかもしれません。その通りです、けれどもここでは声を出すということが大事であり、言葉にならない呻きは聖霊がその祈りを助けてくださいます。「ローマ 8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめき

によって、私たちのためにとりなしてください。」御霊の賜物の一つに、「異言の賜物」があります。異言は、知性で祈るのではなく霊で祈るものです。御霊が御心に従ってくださる異言によって、こうした呻きを言い表すこともできます。異言が与えられようが、そうでないか、大事なものは主に心を注ぎ出すことです。

## 2B 道を知る方 3

3 私の霊が私のうちで衰え果てたとき、あなたこそ、私の道を知っておられる方です。私が歩く、その道に、彼らは、私に、わなを仕掛けています。

ダビデはここで、自分が窮地に陥っていて、もうどうすればよいか分からない状態です。しかし、彼はしっかりと踏みとどまっています。「あなたこそ、私の道を知っておられる」と言っています。これからどのように行けばよいか分からない時に、私たちは立ち止まって主を待ち望むのではなく、とにかく何か行動に移さなければいけないと思います。しかし窮地にいるからこそ、主に自分の道を任せようとしているのです。

ユダの国がアッシリヤに攻められそうになっていた時、彼らは急いで逃げて、南にいるエジプトに助けを求めようとしていました。求めようとするほど、自分たちが窮地に陥っていることを知りませんでした。そのことを、預言者イザヤを通して主はこう語られます。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。ひとりのおどしによって千人が逃げ、五人のおどしによってあなたがたが逃げ、ついに、山の頂の旗ざお、丘の上の旗ぐらいしか残るまい。(30:15-17) 私たちが力を得るのは、唯一、主からであります。落ち着いて信頼すれば、力を得るのです。ダビデはどこから敵が来るか分からない時に、主にその逃げる道をゆだねました。

## 3B 孤独 4

そしてダビデにとって最も辛い思いが、4 節に表れています。

4 私の右のほうに目を注いで、見てください。私を顧みる者もなく、私の逃げる所もなくなり、私のたましいに気を配る者もいません。

ダビデは孤独だったのです。右のほうというのは、自分の力になる方向です。自分の力になるために、彼が相談できる相手、匿ってくれる人、自分に気を配ってくれる人がいないのです。心の慰めを与えてくれる人がいません。

私たちはこのように、共に礼拝を持つことのできる仲がいることは本当に幸いです。私もみなさ

んと定期的にお会いできることは、私の救いになっています。そして、話を聞いてくれ、何よりも祈ってくれる人がいることを知るのには生命線とさえ言えます。しかし、私たちは「群衆の中の孤独」という言葉があるように、たとえ人々がたくさんいても、それでも自分の悩み苦しみを知ってもらうにはあまりにも不十分であることが多々あります。実は、このような孤独というものを通ることは有益なのです。孤独を通ることによって、人に頼るのではなく神ご自身に慰めを得て、その体験を持つという貴重な機会となるからです。ダビデは、この孤独があったからこそ、彼の品性は練り清められ、主に拠り頼む者としてイスラエルを治めることができました。

人間となられたイエス様がこの孤独を味わわれました。ゲッセマネの園における祈りは、その典型です。主は、いつも弟子たちと主におられました。共におられましたが、必ず御父との祈りを行なうために、淋しい所に行かれました。たった独りになるため、いや父なる神といっしょになるために行かれたのです。そしてゲッセマネの園においては、弟子たち十二人からペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れてきて、そして、「ここから離れないで祈っていなさい。」と言われたのです。しかし、少し進んでいって独りで祈られたのでした。イエスさまは、関わりを大切にしておられました。しかし、究極のところでは弟子たちに分かち合うことのできぬ、孤独があったのです。しかし、主はそこで、父の御心のままにという祈りを捧げることができ、それで十字架への道を果敢に進まれたのです。

#### 4B 主こそ受ける分 5

5 主よ。私はあなたに叫んで、言いました。「あなたは私の避け所、生ける者の地で、私の分の土地です。

ここに、「牢獄のようなところにある、広がる土地」のような自由があります。ダビデは洞窟の中にいて、そこで主ご自身を自分の相続する土地としました。主がおられるということが、自分にとっての財産であり所有となったのです。

神に用いられている器は、こうした孤独を通してそこにしかない神の取り扱いを受けて、それがその人の霊性を支えました。パウロが、文字通り牢屋に入れられていた時があります。エルサレムに行って、彼が証しを立てたら騒動が起こったからです。カイザリヤの牢獄で彼は独りになりました。おそらく、最も暗い道を彼は歩んでいたと思います。しかし、「使徒 23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかしたように、ローマでもあかしをしななければならない。」と言われた。」とあります。彼はかけがえのない主のご臨在を、最も孤独な時に体験することができたのです。

このことがいかに優れたことかは、この方が全知全能の神であることを知れば自ずと分かります。「マタイ 28:18-20 わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るよ

うに、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」天においても、地においても、一切の權威の与えられている方が、私たちと共におられるのです。

主の御心を行なうことを決めている人は、必ず孤独を味わいます。これまでは、「他の人たちがやっているから、私もやっていた。」という理由で生きてきたところから、「主が命じられるから、これらのことを行います。」という道を選びます。その道は必ず孤独なのです。自分自身が、周りの多くの人の意向に抗うことを行なうのです。主の御心を行なった人で、孤独を味わわない人は独りもいません。ノアは自分と家族を除いて、主の命令のゆえに全世界の人々に抗いました。アブラハムは、父の故郷を離れて、示された道に向かいました。ヨセフは、エジプトという外国の地で、文字通り牢屋に入れられました。モーセはエジプトから離れて、ミデヤン人の中で羊を飼いました。数ある預言者も、ただ単独で主に召されて、その言葉を語るように命じられたのです。しかし同時に、そうした彼らに神の力が働きます。その人と主が共におられるからです。

## **2A 牢獄からの連れ出し 6-7**

6 私の叫びに耳を留めてください。私はひどく、おとしめられていますから。どうか、私を迫害する者から救い出してください。彼らは私よりも強いのです。7 私のたましいを、牢獄から連れ出し、私があるあなたの御名に感謝するようにしてください。正しい者たちが私の回りに集まることでしょう。あなたが私に良くしてくださるからです。」

### **1B 御名への感謝**

迫害者から救い出され、それからこの牢獄から連れ出してくださるように祈っています。ここで注目しなければいけない言葉は、その目的です。「あなたの御名に感謝するようにしてください。」という願いです。ダビデは、自分自身が救われることを目的にしていませんでした。自分がサウルの手から救われること自体が目的ではなかったのです。自分が救われるのは飽くまでも、自分自身が主に感謝を捧げることができるようにするためでした。祈りは自分が中心ではなく、神が中心なのです。神に栄光を帰して、ほめたたえ、神に感謝を捧げるといふ、神の側に自分が付くための祈りが本来の祈りです。

私たちは祈りの究極の目的を、自分が苦境から救われるためにはいけません。もしそうであれば、十字架にイエスさまが付けられている時に、「自分自身を救ってみろ」と罵った、祭司長らの言葉にイエス様は従ったでしょう。「俺を救え」と要求した、イエス様の横で十字架に付けられている男の言うことを聞かれたでしょう。しかし、イエス様は人々のそうした要求に応えませんでした。そうではなく、自分自身を神への生けるいけにえとすること、自分を捧げることが目的としているのであれば、祈りは聞かれます。例えば、もう一人の十字架刑に処せられていた男が、「御国の位に着く時は、私のことを覚えてください。」という祈りを聞かれました。

どうでしょうか、自分自身を吟味してみてください。今の状況から単に救われたいと思って祈って

いるでしょうか？それとも、自分自身が変わられて、その中で救われていくことを望まないでしょうか？そうすれば主は豊かに逃れの道を備えてくださるのです。

## 2B 正しい者の集まり

そしてダビデは、「正しい者たちが私の回りに集まることでしょう。」と言います。ダビデは、このような自分が主ご自身を受け継ぐ地としていくという祈りを捧げている中で、主がダビデを選び、王としているということを信じる者たちが、彼の周りに集まってきました。

この順番が大事ですね。ダビデは自分自身がしっかり祈りの中で主の前に立っていたから、だからこそその正しい者たちとの交わりと協力が生かされます。主にしっかり個々が拠り頼んでいるからこそ、その交わりが豊かにされます。自分をしっかりさせるために交わりに参加するのであれば、その人はいつも問題だけを交わりの中に持ち込みます。こんな問題がある、あんな問題があると言うのですが、仲間もいっしょに祈ったり、知恵を尽くして対処したりしますが、その交わりは問題対処だけのためになってしまいます。私たちの主にある交わりが豊かにされ、深みを持ち、力が現われるようになるには、それぞれがたった独りで主に出会うという、しっかりとした主とのつながりが必要なのです。

主との交わりをしているからこそ、私たちの互いの交わりは恵みを分かち合うことになります。主の恵みを分かち合うので、主ご自身の働きをそれぞれが受けることができ、霊的に励まされるのです。ですから、ダビデと同じように孤独から始めてください。決して、その現実から目を離さないでいてください。結局、自分自身がどうなのか、ということを主が戻ってこられる時に尋ねられるのです。そして悪を退けて、主を追い求める中で、主は同じように主を求める人々の交わりを与えてくださいます。「それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。(2テモテ 2:22)」